

筆者は、2007年から2009年にかけて長崎新聞のウェブサイトの連載企画「長崎新聞@コラム」に記事を書いてきた。この文章は2008年1月25日に同コラムに掲載された記事に、若干手を加えたものである。「長崎新聞@コラム」はすでに連載が終了しており、現在閲覧できない。(2016年6月)

僕はティナ・ブルックスが大好き

満岡渉

かつて Tina Brooks というテナー・サクソ・プレイヤーがいた。本当はティナ・ブルックスと発音するらしいが、わが国ではティナということになっている。女性のような名前だが男である。そういえば少し気の弱そうな顔をしている。



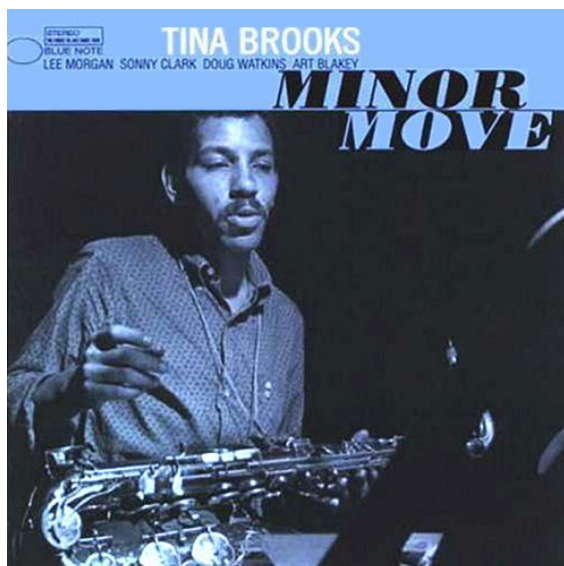
1932年生まれ、1974年没。早死になのは同時代のジャズメンには珍しいことではない。42年の生涯で彼が参加したレコーディングは14回。大半がブルーノート・レーベルでのものだが、この中で彼がリーダーとなったセッションはわずか4回、LP4枚分だ。うち彼の存命中にレコードとしてリリースされたのはたったの1枚である。

彼が幻のテナーマンと呼ばれ、多くのジャズ・ファンにとって特別の存在であり続けているのは、しかし、その作品が少ないからだけではない。残された作品が、他の誰とも違ういぶし銀の輝きを放っているからだ。

ブルーノートの創始者にしてプロデューサーのアルフレッド・ライオンは、多くの無名ジャズ・ミュージシャンを発掘し、育てたことで知られている。ティナ・ブルックスが最初にライオンに起用されたのは1958年2月、ブルーノートの看板スターだったオルガニスト、ジミー・スミスのセッションだった。このときの演奏はジミー・スミスの「ハウス・パーティ」(Blue Note 4002)と「サーモン」(同 4011)とに収録されている。これが採用試験だったのか、その1ヶ月後の3月16日、ライオンはブルックスに待望の初リーダー作吹き込みを命じた。

初めてのリーダー・セッションをサポートしたのはトランペットのリー・モーガン、ピアノにソニー・クラーク、ベースはダグ・ワトキンス、ドラムにアート・ブレイキー。これ以上は望めないよ

うなメンバーだったが、結果はなぜかお蔵入り。そんなに出来が悪かったのかというと、まったく違う。ブルーノートの他作品と比べても決して見劣りしないご機嫌なハードバップである。ブルックスの未発表音源に共通していえることだが、なぜライオンのお眼鏡に合わなかったのか、首をひねるしかない。



ブルックスの幻のデビュー作といえるこの音源は、1980年になって初めてレコード化された。タイトルを「マイナー・ムーヴ」という。現在はCDでも入手できるのでぜひ聴いていただきたい。

彼のテナーは力強くも流麗でもないが、少しかすれた渋い音色には物悲しい味わいがある。加えて彼の書く曲がいい。ラテン系のメロディーは美しく繊細で、懐かしいがどこか都会的だ。タイトル曲「マイナー・ムーヴ」には、それが端的に現れている。

1960年6月19日、ブルックスは意気投合した新人トランペッター、フレディー・ハバードのデビュー作に参加する。「オープンセサミ」(Blue Note 4040)だ。タイトル・ナンバーの「オープンセサミ」はブルックスが提供したものである。後にジャズ界を代表するトランペッターになるハバードのデビュー曲がブルックスの作品だということはあまり知られていない。が、一聴してそれとわかるメロディーだ。



ブルックスにとって2回目のリーダー・セッションはその1週間後、6月25日に行なわれた。これが当時レコードとして唯一の目を見た「トゥルー・ブルー」(Blue Note 4041)である。名盤ぞろいのブルーノートの中でも知る人ぞ知る屈指の1枚だ。冒頭の「グッド・オールド・ソウル」から哀愁のブルックス節が炸裂する。

なんとも不可解なのは1960年10月20日に行なわれた3回目のセッションだ。この音源には「バック・トゥ・ザ・トラックス」というアルバム・タイトルが付けられ、アルバム番号(Blue Note 4052)もジャケット写真も決まり、カタログに写真まで掲載された(写真参照)。にもかかわらず発売されなかったのである。入手困難、ではなく入手不可能な幻の1枚になったのだ。

「バック・トゥ・ザ・トラックス」がアルバムの形で発売されるのは、90年代に入ってから。ふたを開けてみれば、その内容は「トゥルー・ブルー」を凌ぐ素晴らしいものだった。



では、そこまで準備し、しかも内容も素晴らしい「バック・トゥ・ザ・トラックス」のリリースは何故見送られたのか。後年ブルーノート研究家のマイケル・カスクーナにその理由を尋ねられたライオンは、次のような簡潔にして身も蓋もないコメントを残している。

「覚えてないね」

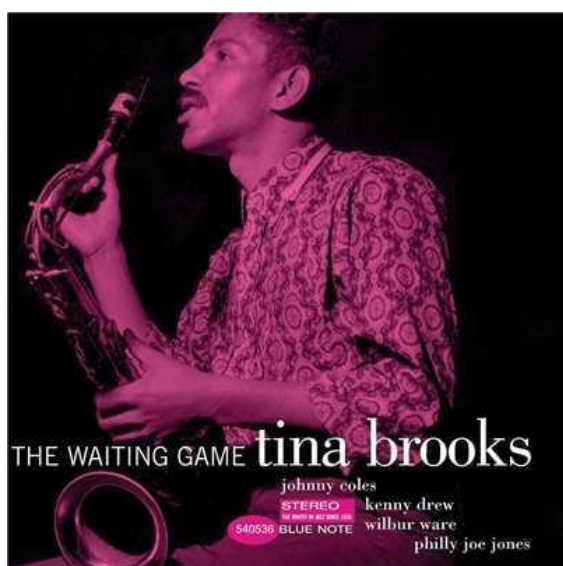
前述のように、「バック・トゥ・ザ・トラックス」には1960年10月20日のセッションが収録されているが、1曲だけ例外がある。その曲は、同年9月1日ブルックスがジャッキー・マククリーンの「ジャッキーズ・バッグ」(Blue Note 4051)のセッションに参加したとき録音された。当然「ジャッキーズ・バッグ」に収録されるはずだったが、ブルックスの10月20日の録音がLP1枚分には足りなかったため、急遽プロデューサーのライオンが、「バック・トゥ・ザ・トラックス」に回したのである。

今では考えられないことだが、当時のブルーノートでは、誰かのリーダー・セッションで録音した曲を、そこに参加した別のミュージシャンのアルバムに振り分けることが珍しくなかった。決めるのはライオンである。ブルーノートではライオンの指示が絶対だったし、それだけライオンはミュージシャンから信頼されていた。なにより彼らにとっては、金をもらえて自分のアルバムが発売されるだけで御の字だった。

この曲こそ、ブルックス自身のペンによる至高の名曲、「ストリート・シンガー」だ。

僕は思う。「ストリート・シンガー」が、「バック・トゥ・ザ・トラックス」でなく、そのままマククリーンの「ジャッキー・バッグ」に収められていれば、彼の人生は変わっていたらどうかと。

この曲が当時発表されていれば、ブルックスは名曲の作曲者として評価され、もしかしたら少しましな人生を歩いていたかも知れない。一方、死後に発表されたとはいえ、正真正銘のブルックス名義のアルバム「バック・トゥ・ザ・トラックス」が名盤として愛されているのも、「ストリート・シンガー」に負うところが大きいのである。



ブルックス最後のリーダー・セッションは 1961 年 3 月 2 日に行なわれた。が、これも例によってお蔵入り。1985 年に発掘され、現在は CD 化もされている。繰り返しになるが、このアルバムも当時リリースされておかしくない出来だった。僕のお気に入りには「ストレンジャー・イン・パラダイス」だ。

自分の演奏がレコード化されるのを待ち望んでいたに違いないブルックスの、最後のアルバムのタイトルは、皮肉にも「ウェイティング・ゲーム」という。

当時の多くのジャズメンがそうであったように、ブルックスもまたジャンキーだった。そのせいか、晩年は病院と刑務所で過ごす日々だったという。実生活も惨めだったろうが、ミュージシャンとしての実績も、たったのアルバム 1 枚だ。ジャズの歴史に彼が残した足跡はあまりに小さく、後世に与えた影響などこれっぽっちもない。ろくでもない人生だったと思いながら死んでいったのかも知れない。ともあれ、死後 20 年近く経って彼のリーダー・セッションはすべてアルバム化され、長かった「ウェイティング・ゲーム」は終わった。

以前友人が、「ほとんどの人の一生なんて、歴史の教科書に残らない、些細な時空のひずみにすぎないさ」と語ったことがある。そんな些細な時空のひずみに違いないブルックスの音楽は、しかし今、海を越え世紀を越えて、時折誰かの心を振るわせている。悪くない人生だったじゃないかと、僕は思う。

「グッド・オールド・ソウル」

<https://www.youtube.com/watch?v=Dtx8rsp44tc>

「フレディー・ハバード/オープンセサミ」

<https://www.youtube.com/watch?v=Mfes2Wptxx8>

「ストリート・シンガー」

<https://www.youtube.com/watch?v=LXECWSn2dEU>

「マイナー・ムーヴ」

<https://www.youtube.com/watch?v=C6fqQKYYL3s>